

後	編
記	集

▽一九八一年に、日蓮聖人ご入滅七〇〇年を迎える。遠忌を当面の目標とする諸事業は、日蓮宗を真に伝道教団として確立させるかいなかの試金石といえよう。それ

は、たんに、一般的な事業の実行だけで済ますことはできない。なによりも、法華経の信仰の教説を末法日本に弘通された日蓮聖人の信行学を、原点にたちかえて明らかにし、不断に研究と教化をつみ重ねていくことでなければならぬ。日蓮聖人にとって、知恩報恩とはいったい何であったのか、日蓮聖人門下たる私たちは、日蓮聖人の示された報恩の精神と人生を通して、他ならぬ現代に生きる人々に、いかなる報恩の生き方をさし示さねばならないか——まず、この観点をぬきにしては、遠忌報恩にとりくむことはできない。本号において△恩の構造▽を特集したのも、こうした根本的姿勢をすこしでも考え、深めていこうとしたからである。

▽現宗研は、すでに教化研究会議において△報恩の教化活動▽をメインテーマにうちだし、いくつかの資料を作成することによって、さらに現場の教師間によって、このテーマの討議を行ってきた。そして、この問題をひき続き話し合い、いっそう深めつゝ布教内容の中心とするべく研究を展開しようとしている。特集の論文のうち、三田村竜全師（現宗研囑託）および中濃教篤師（現宗研所長）の論文

は、その研究会議資料として提出されたものを基礎に、あらたに加筆補正したものである。星光諭（研究員）、石川康明（研究主任）兩名の論文は、あらたに聖人の報恩観ならびにその時代的特質を考えようとしたものである。星光諭師の抜きだした報恩関係の遺文とあわせて参照された。特集論文をうけとめられ、報恩教化に活用していたぐれば幸いである。

▽現宗研は、ひろく宗内外の方々にも戸をひろげた宗教研究の講演と懇談の場として、公開講座を開設している。本号では、第二回講座において講演された佐藤智雄師（現宗研顧問）による「宗教的信念体系について」を掲載した。三時間半余にのぼる講演要旨を基礎に、師自ら加筆され、ほとんど書下ろしの論文としてまとめなおされたもので、宗教と社会学の研究視野から提出された今日の問題への姿勢を問いなおすものといえる。公開講座は、自由で自主的な研究成果の交流を第一としており、その内容はもとより現宗研としての統一見解ではないが、信仰教説の普遍性、永遠性と現代への適応性、創造性をいかに各分野から追求していくか、という高い目標に一步でも近づいていこうとする研究交流の場である。こうした活動の必要さ、重要さについて、住職、教師、研究者、学生各位の理解と協力を切望する。

▽研究ノートもまた、ひろく研究発表の場とするもので

ある。早水弁静師（東京本妙院内）の法要次第及び声明墨譜に関する研究は、あたらしい分野を開拓したものであり、宮川一敬師（事典刊行委員会）の研究ノートは、日蓮宗批判史の研究という自らのライフワークの一環としてまとめたものである。それぞれ、ユニークな内容を示すものであり、参考に資すること大と思われる。

▽さまざまな活動をされながら、しかも研究をも行っていく、そうした教師、研究者がさらにひろがり、本誌をその発表と交流の場にしていただくことを望んでいる。また本誌をはじめ教研とその資料はじめ種々の事業報告から、現宗研の活動の一端を理解され、大方の協力と交流を強化されることをあわせてお願いしたい。

△石川康明記▽